

韓愈「進學解」の段落構成をめぐって

大東文化大學大學院 山内良太

はじめに

「進學解」が韓愈（七六八—八二四）の代表作であることは改めて言うまでもない。多くの總集のみならず、新舊『唐書』の韓愈傳にも全文が收められているからである。しかし、そうであるにもかかわらず、これまで全く論じられることのなかった問題がある。

それは、「進學解」の段落を三つに分けるのか、それとも四つに分けるのかという問題である。このような問題をわざわざ取り上げるのは、「進學解」が太學の教師とその學生が對話するという形式の作品であり、その段落が話し手の交代にしたがって分けられてきたからである。

つまり、三段落構成説では教師の臺詞である箇所が、四段落構成説では學生の臺詞になってしまう、という問題が「進學解」には見られるのである。

「三段落構成説」とは、「進學解」を三つの段落で構成された作品と理解するもので、從來の通説である。各段落の話し手は、第一段落が教師で、第二段落が學生で、第三段落が教師である。

一方、「四段落構成説」とは、三段落構成説が第三段落と見なしてきた箇所を二つに分け、その前半部分を第三段落

と、その後半部分を第四段落と理解するもので、論者が支持するものである。四段落構成説では、各段落の話し手が、第一段落が教師、第二段落が學生、第三段落が教師、そして、第四段落が學生というものに變わる。

三段落構成説よりも四段落構成説の方が妥當であると論者が考へるのは、三段落構成説には次のような三つの問題點が見られるからである。

①「先生」という言葉の一般的な使われ方との不一致。

②「進學解」に先行する對話作品に見られる様式との不一致。

③韓愈の自己の描き方に見られる特徴との不一致。

いずれも他の作品との關係に着目して、「進學解」を讀んだときに、はじめて生じる問題點である。これらの問題點は「進學解」を四つの段落に分けて讀むことで解消される。したがって、「進學解」は四つの段落に分けて讀まなければならぬというのが、本論考の結論である。

第一章 「進學解」は三段落構成の作品か

この章では「進學解」の段落構成に對する先行研究の理解を整理し、その問題點を指摘したい。

第一節 三段落構成説

「進學解」を三段落構成の作品と理解している例は、枚擧に暇がない^③。そのなかでも、山崎純一「韓愈の設論二篇——とくにその滑稽感について——」^④や、西上勝「韓愈『進學解』の敘法について」^⑤は、「進學解」が三段落構成の作品であることを、はっきりと述べたものである。

この作品（「進學解」を指す…論者補）は全七四三言。押韻にもかなりの注意を拂った力作である。三大段落（傍點論者）に敘述を分け（山崎氏）

「進學解」は『韓昌黎集』卷十二雜著類に收められる。三段から成る（傍點論者）國子博士と學生の對話篇である（西上氏）。

「進學解」の段落構成について言及しているもので、最も早い時期のものとしては、清の林雲銘評注『韓文起』⁽⁵⁾が擧げられる。

首段、以進學發端、中段、句句是駁、末段、句句是解。前呼後應、最爲綿密（はじめの一段は學問を進歩させる理由を述べることによって絲口を起こしている、眞ん中の一段の言葉は反駁である、末尾の一段の言葉は申し開きである）。

前後は呼應し、この上なく綿密である）。

「首段」「中段」「末段」という言葉からは、「進學解」を三つの段落に分けて解釋していることが讀み取れる。各段落の内容は「發端」「駁」「解」という言葉で説明されている。

まず、「發端」は對話の絲口である。第一段落では、教師が學生たちに訓誨を述べている。訓誨の内容は、「今」は適材適所の登用が行われているのだから、自らの未熟だけを思い悩み、ひたすらに修養を積むべきだというものである。次に、このような訓誨に一人の學生が反「駁」し、教師と學生の對話が始まる。第二段落では、この教師が不遇な目に遭っていることが、學生によって述べ立てられている。言いかえれば、學生はそのことを根據にして、教師の訓誨が欺瞞に満ちていることを、すなわち「今」は適材適所の登用が行われていないことを指摘しているのである。

そして、「解」は申し開きである。第三段落では、前半部分には「昔」は適材適所の登用が行われていなかったことが、後半部分には教師を批判する言葉と「今」の人材登用を非難する行爲を批判する言葉が書かれている。これらを教

師が發したものと理解すれば、それは、自分が閑職に置かれているのは當然だという自己批判を行うことによって、「今」の人材登用の正當性を主張したものと、すなわち「今」は適材適所の登用が行われているという申し開きを教師が學生に述べたものと考えられる。

このように、三つの段落に分けて讀んだ場合の「進學解」は、教師が學生たちに訓誨を述べ、學生の一人がその訓誨に反駁し、教師がその反駁に申し開きをする話だと言える。そして、以上のような基本的な解釋については、いずれの先行研究も大きく異なるところはない。

第二節 四段落構成説

「進學解」が四段落構成の作品であることを、はっきりと述べた先行研究は存在しない。ただ、そのように理解していると考えられるものに、清水茂『韓愈I』がある。¹⁾

清水氏は、三段落構成説における第三段落を次のように訓讀し、現代日本語に譯している。

先生曰、吁子來前。(中略) 其遇於世何如也。今先生、學雖勤而不繇其統。(中略) 欲進其豨苓也。

先生の曰わく、吁、子、來り前め。(中略) 其の世に遇えること何如ぞや、と。今、先生、學勤めたりと雖も其の統に繇らず。(中略) 其の豨苓を進めんと欲するなり。

先生、「おい、きみ、前へ來い。(中略) その人たちの時代のめぐりあわせはどうであったか。(前半部分…論者補)」

「いま、先生は、學問にはげんではいるが傳統によらぬ。(中略) 豨苓を飲ませようとするものなのです。(後半部分…論者補)」

まず、訓讀では「其の世に遇えること何如ぞや、と」という箇所「と」という助詞を添えていることが確認できる。

この「と」が會話の終わりを示すものであることは改めて言うまでもない。そして、それが三段落構成における第三段落の途中に書かれていることは、「吁子來前」から始まる教師の臺詞が「其遇於世何如也」で終わっていることを示しているはずである。

つまり、清水氏は「今先生」以下を教師の臺詞とは理解していないのである。それは日本語譯に付けられた鉤括弧を見ても疑いない。

次に、日本語譯では前半部分が「おい、きみ、前へ來い」という命令の口調で始まっているのに對して、後半部分が「飲ませようとするものなのです」という丁寧な口調で終わっていることが確認できる。そして、命令の口調は第一段落（教師の臺詞）と第三段落の前半部分だけに、丁寧な口調は第二段落（學生の臺詞）と第三段落の後半部分だけに見られる。⁽⁹⁾

つまり、清水氏の日本語譯には明らかな譯し分けが見て取れるため、第三段落の前半部分を教師の臺詞と、後半部分を學生の臺詞と理解していたと考えられるのである。また、詳細については後述するが、「今先生」を「いま、先生は」と譯している點も、そのことを裏付けている。

清水氏は「今先生」以下が學生の臺詞であるとも、「進學解」が四段落構成の作品であるとも述べていないが、その訓讀と日本語譯を見れば、そのように理解していたことは明らかである。

このように「進學解」の段落構成に對する先行研究には、従來の三段落構成説と清水氏の四段落構成説が併存している、という問題が見られる。

この問題は當然「進學解」の解釋にも深く関わっている。なぜなら、三段落構成説では第三段落の後半部分に、四段落構成説では第四段落にあたる「今先生」以下には、教師を批判する言葉が書かれているからである。そして、それを

述べる者が段落の分け方によって變化するからである。

そのため、「今先生」以下が教師の臺詞となる三段落構成説では、教師が自己を批判していることになるのに對して、それが學生の臺詞となる四段落構成説では、教師が學生に批判されていることになる。教師の自己批判と學生の教師批判とでは、その意味するところが大きく異なってくるため、三段落構成説と四段落構成説では描かれる教師像に大きな變化が生じることになるのである。

以上のような「進學解」の段落構成に關する問題は、これまで問題として意識されることすらなかった。「進學解」が三段落構成の作品であることは、ゆるぎのない前提条件のように理解され、そこに疑問が差し挟まれることはなかったのである。しかし、四段落構成の作品と理解している先行研究が存在している以上、三段落構成説の當否について検討する必要があるのではないだろうか。

第二章 三段落構成説の問題點

この章では「はじめに」で述べた三段落構成説に對する三つの問題點について検討してみたい。

第一節 「先生」は教師の自稱なのか

一つ目の問題點は「先生」という言葉の一般的な使われ方との不一致である。「先生」は一般的には他者への尊稱として用いられている。それは韓愈の作品における用例を見ても疑いない。その點から考えれば、「進學解」に見られる「先生」は教師への尊稱と理解しなければならない。

しかし、三段落構成説では「先生」を教師の自稱と理解することになってしまう。この節では、そのような問題點を

検討したい。

(一)「先生」が教師の自稱と理解されてきた理由

まずは、三段落構成説では「先生」を教師の自稱と理解する理由について考えてみたい。次に示すのは、四段落構成説における各段落の冒頭である。

第一段落 (教師の臺詞)

國子先生、晨入太學、招諸生、立館下、誨之曰、業精于勤、荒于嬉 (國子監の先生は、早朝に太學へ來ると、學生たちを呼び寄せ、校舎の前に立たせ、教諭して言った、「學業は勤しむことで精通し、遊ぶことで荒廢する」)。

第二段落 (學生の臺詞)

言未既、有笑于列者曰、先生欺餘哉 (言葉はまだ終わっていないが、列に笑う者が居て言った、「先生は私を欺かれるのですか」)。

第三段落 (教師の臺詞)

先生曰、吁子來前 (先生は言った、「ああ、きみ前へ來なさい」)。

第四段落 (學生の臺詞)

今先生、學雖勤而不繇其統 (今、先生は、學業については、勤しんではいるが、本筋には従っていない)。

問題としたいのは第四段落の「先生」である。この「先生」は三段落構成説では教師の自稱と理解しなければならぬ。なぜなら、三段落構成説は第四段落 (學生の臺詞) を第三段落の後半部分 (教師の臺詞) と理解してはじめて成り立つからである。

各段落を見ると、第一段落から第三段落には「國子先生」「笑于列者」「先生」という話し手の名前と「曰」が書かれ

ているのに對して、第四段落にはそれらが書かれていないことが確認できる。

言いかえれば、第一段落から第三段落では話し手の交代が明示されているのに對して、第四段落ではそれが明示されていないのである。そのために、第四段落は第三段落の後半部分と見なされてきたのだと考えられる。

しかし、對話形式の作品について言えば、話し手の交代を明示していないことが、話し手の繼續を意味しているとは限らない。なぜなら、話し手の交代が明示されていないにもかかわらず、話し手が交代している例が存在しているからである。

例えば、『文選』所收の司馬相如「子虛賦」は「烏有先生」と「子虛」という作中人物が登場する作品である。それらの者が對話する場面は次のようになっていいる。

① 烏有先生問曰、今日耽樂乎（烏有先生は「今日の狩りは楽しかったか」と質問した）。

② 子虛曰、樂（子虛は「楽しかったです」と言った）。

③ 獲多乎（烏有先生は「獲物が多かったのか」と言った）。

④ 曰、少（子虚は「少なかったです」と言った）。

⑤ 然則何樂（烏有先生は）「それなら、どうして楽しかったのだ」（と言った）。

③、⑤では話し手の交代が明示されていない。しかし、臺詞の内容からして、話し手が交代していることは明らかである。周知のように、このような例は『論語』にも見られる。^①そのため、話し手の交代を明示せずに話し手が交代することは、對話形式の作品ではそれほど珍しいことではないのだと言える。

確かに、「進學解」の第四段落には、話し手の交代を明示する言葉がない。しかし、「先生」は教師の自稱ではなく、教師への尊稱と理解すべきである。次に、その理由について説明したい。

(一) 「先生」を教師への尊稱と理解すべき理由

問題の「先生」は従來の三段落構成説ではどのように理解されてきたのであろうか。清代の過珙、黃越『詳訂古文評註全集』⁽¹²⁾では次のような注釋を付けている。

此先生是自爲對弟子之言、謂雖勤於學業、尙未能得其要領、解上口不絕吟一段（この「先生」という言葉は弟子の言葉に自分で答えたものである。學業に勤しむも、未だその要點を習得していないことを言っている。第二段落の「口不絶吟」から始まる一段に申し開きをしているのである）。

この注釋からは問題の「先生」を教師の自稱と理解していることが読み取れる。また、同様の理解をしている星川清孝『唐宋八大家文讀本一』などの日本語譯では、「今先生（自分）」は「というように丸括弧をつけて「自分」などの言葉を補うことによつて、そのことを示している」⁽¹³⁾。

一方で、四段落構成説の例として挙げた清水氏の日本語譯では、言葉を補わずに、「いま、先生は」とそのまま譯している。それが、「先生」を教師の自稱ではなく、教師への尊稱と理解していたからであることは改めて言うまでもない。

ところで、「先生」を自稱と理解する先行研究では、どうして「先生」という難しくもない言葉にわざわざ注釋を付けたのであろうか。もし、「先生」を自稱と理解することが一般的であったなら、そのような必要はなかったはずである。このことは「先生」が普通は自稱と理解し難いことを、逆に説明しているのではないだろうか。「先生」を自稱と理解するのは妥當なのであろうか。

手始めに『漢語大詞典』⁽¹⁴⁾を引いてみると、七番目に「文人學者的通稱。可自稱、亦可稱人（文人や學者の通り名。自分で自分を呼ぶこともできるし、人を呼ぶこともできる）」とある。これは「先生」が自稱としても使えることを示し

ている。その用例として挙げられているのは次の二つである。

『史記・三代世表補』：「張夫子問褚先生（張夫子は褚先生に質問した）。司馬貞素隱：「褚先生名少孫（褚先生の名は少孫である）。」

《文選・皇甫謐〈三都賦序〉》：「玄晏先生曰：『古人稱不歌而頌謂之賦。』（玄晏先生は『古の人は歌わないで、朗唱することを賦と言う』と言った）李善注：「謐自序曰：『始志乎學而自號玄晏先生』……先生、學人之通稱也（皇甫謐『自序』には『始め學に志し、自ら玄晏先生と號す』とある。……先生は學問に携わる人の一般的な呼稱である。）」

『史記』の補作者である褚少孫が自ら補筆した箇所で「褚先生」と書けば、それは自分で自分を「先生」と呼んでいることになる。また、自らを玄晏先生と號する皇甫謐が自らの著作で「玄晏先生」と書けば、それもまた自分で自分を「先生」と呼んでいることになる。

確かに、これらは「先生」が自稱として用いられている例である。しかし、そうであるからといって、「進學解」の問題箇所を同じように理解することはできない。

なぜなら、『史記』（三代世表補）や「三都賦序」では作者が自らの著述で自分を「先生」と呼んでいるのに對して、「進學解」の問題箇所では教師が自らの臺詞で自分を「先生」と呼んでいることになるからである。

言いかえれば、前者は語り手としての作者が、地の文において作中人物としての自分を「先生」と呼んでいるのであり、それは、作中人物である教師が、會話文において作中人物である自分を「先生」と呼んでいることになる後者とは異なるものである。

したがって、『漢語大詞典』が挙げるような自稱の用例は、問題の「先生」を教師の自稱と理解することの根據には

ならないのである。

次に、韓愈の作品における「先生」の用例を確認したい。「進學解」を除くと全部で七十五ある用例を、誰が誰を「先生」と呼んでいるのかという基準で分類すると、それぞれの用例数は次のようになる。ここで言う「他者」とは韓愈以外の者を總稱した言い方である。

①韓愈が他者を「先生」と呼ぶもの…58例

②他者が韓愈を「先生」と呼ぶもの…5例

③韓愈が韓愈を「先生」と呼ぶもの…0例

④他者が他者を「先生」と呼ぶもの…12例

①の例としては「寄廬全」や「貞曜先生墓誌」が挙げられる。これらの作品では語り手としての韓愈が友人である盧仝や孟郊を「先生」と呼んでいる。

②の例としては「送陳密序」や「唐河中府法曹張君墓碣銘」が挙げられる。「送陳密序」では陳密という學生が韓愈を「先生」と呼んでいる。

太學生陳密請於餘曰、「密承訓於先生、今將歸覲其親、不得朝夕見、願先生賜之言」（太學の學生である陳密が私に頼み事をした「私は先生から教えを受けていますが、今度、親許に歸省いたします。朝と晩にお目にかかることができません。先生、どうか私に言葉を授けてください」）

「唐河中府法曹張君墓碣銘」では女主人に傳言を頼まれた下女が韓愈を「先生」と呼んでいる。

有女奴、抱嬰兒來、致其主夫人之語曰、「（中略）今妾不幸、夫遇盜死途中、將以日月葬、妾重哀其生志不就、恐死逐沈浪、敢以其稚子汙兒、見先生。」（下女が赤ん坊を抱いてやって来て、女主人の言葉を傳えた。「（中略）いま、

私は不幸にも、夫が盜賊に遭い道中で亡くなりました。何月何日に埋葬するつもりです。生きているときは志が成就せず、死んでしまえば最後には忘れ去られてしまう夫を私はひどく不憫に思っています。だから、思い切って乳飲み子の汗を先生にお目にかからせました」

②に分類されるもう一つの作品⁽¹⁸⁾も含めて、そのいずれもが他者から制作を依頼されたものである。韓愈が作中で「先生」と呼ばれるのは、制作の経緯を説明する文脈のなかで、依頼者の口を借りたときに限られている。自分の作品で自分のことを「先生」と表記していても、自分の口で自分のことを「先生」と呼んでいるわけではないのである。

③に分類される作品は、『漢語大詞典』が自稱の用例として挙げていた『史記』（三代世表補）や「三都賦序」のようなものを含めたとしても、一例も存在しない。

④の例としては「行難」や「送石處士序」が挙げられる。「行難」では作中人物としての韓愈と「或^{あるひと}」が陸參なる者を「先生」と呼んでいる。また、「送石處士序」では語り手としての韓愈と作中人物である烏重胤などが石洪なる者を「先生」と呼んでいる。

④に分類される作品は、分類基準の上では「先生」と呼ぶ者と呼ばれる者が重なる可能性があるが、そのようなものは一つとして存在しない。

このように韓愈の作品における「先生」は、自他を問わず自稱として用いられることはなく、すべて人物甲から人物乙への尊稱として用いられているのである。

それでは、「進學解」における「先生」の用例を確認したい。問題箇所を除いたすべての該箇所は次の通りである。

第一段落（教師の臺詞）

國子先生、晨入太學、招諸生、立館下、誨之曰（國子監の先生は、早朝に太學へ來ると、學生たちを呼び寄せ、校

舎の前に立たせ、教え諭して言った)

第二段落 (學生の臺詞)

先生、欺余哉。弟子事先生、于茲有年矣。先生、口不絕吟於六藝之文、手不停披於百家之編 (先生は私を欺かれるのですか。弟子として先生にお仕えすること數年になります。先生は、口ではいつも六經の文句を口ずさみ、手ではいつも諸子百家の書物を開いている)。

先生之業可謂勤矣 (先生は學業については勤しんでおられると言えます)。

先生之於儒可謂有勞矣 (先生は儒學の復興については骨折っておられると言えます)。

先生之於文可謂閱其中而肆其外矣 (先生は文章については内容を豊富に表現を自由になされたと言えます)。

先生之於爲人可謂成矣 (先生は人柄については完成しておられると言えます)。

第三段落 (教師の臺詞)

先生曰 (先生は言った)

これらの用例に共通しているのは、教師以外の者が教師を呼ぶ際に「先生」が用いられていることである。第一段落と第三段落の「先生」は地の文に書かれている。そのため、語り手が教師を呼んだものだと考えられる。第二段落のそれは會話文に書かれている。改めて言うまでもなく、學生が教師を呼んだものである。

全部で十ある用例を、誰が誰を「先生」と呼んでいるのかという基準で分類すると、それぞれの用例數は次のようになる。語り手が教師を呼んだものが二例、學生が教師を呼んだものが七例、問題箇所が一例。問題箇所以外はすべて教師への尊稱であることが確認できる。

以上のことから考えれば、「先生」を教師の自稱と理解するのは誤りだと言わざるを得ない。そもそも、古代漢語に

おける自稱は數多く存在するのであるから、自分を呼ぶのに「先生」を用いる必然性はどこにもない。「進學解」のなかの學生が自分のことを「余」と呼ぶように、その手の自稱を用いれば、ことが足りるのである。

したがって、それにもかかわらず、「先生」を用いているのは、「今先生」以下が、教師ではなく、學生の臺詞であることを「曰」に代わって示すためであり、その點から考えれば、四段落構成説の方が妥當であると言える。

第二節 最後の話し手は教師なのか

二つ目の問題點は先行する對話作品に見られる様式との不一致である。對話形式の作品には、先に話し始める「先攻の話し手」と、後から話し始める「後攻の話し手」がいる。そして、「進學解」に先行する對話作品には、後攻の話し手と最後の話し手が同一人物になるという様式が見られる。その點から考えれば、「進學解」の最後の話し手は後攻の話し手である學生でなければならない。

しかし、三段落構成説では先攻の話し手である教師が最後の話し手になってしまう。この節では、そのような問題點を検討したい。

まずは、「進學解」を對話作品の系譜のなかで批評した言説を挙げ、「進學解」に基づいたとされる作品を確認したい。例えば、南宋、朱熹（一一三〇—一二〇〇）の『朱子語類』^①（卷一百三十九・論文上）には次のようにある。

「賓戲」「解嘲」「劇秦」「貞符」諸文字、皆祖宋玉之文、「進學解」亦此類。「陽春白雲云云」者不記其名、皆非佳文（班固「賓戲」、揚雄「解嘲」、劇秦、柳宗元「貞符」といった諸々の文章は、いずれも宋玉の文章を始祖としてゐる。韓愈「進學解」もまた同じ類である。「陽春白雲云云」は、その名を記していない。いずれも佳作ではない。）。

朱熹は「進學解」を「賓戲」や「解嘲」と共に宋玉の「對楚王問」より始まる系譜に位置づけている。そして、それらの作品に佳作ではないという評価を下している。

一方、洪邁（一一二二—一一〇二）『容齋隨筆』⁽⁸⁾（卷七・七發）には次のようにある。

東方朔「答客難」自是文中傑出。揚雄擬之爲「解嘲」、尙有馳騁自得之妙。至於崔駰「達旨」、班固「賓戲」、張衡「應問」、皆屋下架屋、章摹句寫、其病與「七林」同。及韓退之「進學解」出、於是一洗矣（東方朔の「答客難」は文章のなかでも抜きん出ている。揚雄はこれをまねて「解嘲」を作った、それでもなお奔放さがあり、自然と妙を得ている。崔駰「達旨」、班固「賓戲」、張衡「應問」に至ると、いずれも屋根の下に屋根をかけるかのように、人まねで新味がなく、章立ては模倣であり、語句は模寫であり、その病は「七林」と同様だ。韓愈の「進學解」が作られるに及んで、その病はすっかり洗い流された）。

洪邁は「進學解」を「解嘲」や「賓戲」と共に「答客難」より始まる系譜に位置づけ、章立てや語句にまで及ぶ猿真似の病を洗い流した作品として高く評価している。

同じ時代を生きた兩者の言説を比較すると、「進學解」に対する評價自体は正反對であるものの、そこに挙げられている作品についてはある程度の共通性を認めることができる。例えば、兩者が共に挙げている揚雄「解嘲」、班固「賓戲」と、洪邁がそれらの始祖として挙げている東方朔「答客難」は、いずれも賓客の質問に主役が答える作品で、「文選」の設論に収められている。

次には、そのような意味では對話作品の代表的なものと言える「答客難」「解嘲」「答賓戲」の作中人物が話す順番に注目したい。

東方朔「答客難」→「客」↓「東方先生」

揚雄「解嘲」…「客」↓「揚子」↓「客」↓「揚子」

班固「答賓戲」…「賓」↓「主人」↓「賓」↓「主人」

いずれの作品でも、「東方先生」「揚子」「主人」という後攻の話し手が、最後の話し手になっていることが確認できる。このことは、以下に挙げる先行論文の指摘から見ても、對話形式の作品に共通する特徴の一つだと考えられる。

例えば、中里見敬「中國文學における物語行爲の諸相―賦と自傳の場合―」¹⁹⁾には「『文選』所收の賦で…論者補」複数の作中人物が順に語った場合には、最後の語り手が他の語り手を言い負かしてしまふ、「傍點論者」とある。中里氏は『文選』所收の賦には、最後の話し手が他の話し手を言い負かすことで、對話の勝利者になるという特徴が見られることを指摘している。

また、谷口洋「揚雄の「解嘲」をめぐって―「設論」の文學ジャンルとしての成熟と變質―」²⁰⁾には「(『莊子』盜跖篇、『史記』日者列傳など…論者補)も、やはり主客問答の體裁をとってはいるが、そこで重視されるのは、説得の内容よりはむしろ、攻撃を受けた主人公が、逆に相手をへこませる(傍點論者)というプロットそのものである」とある。谷口氏は「主客問答の體裁」をとった文章では、後攻の話し手である「攻撃を受けた主人公」が、「逆に相手をへこませる」ことによって、對話の勝利者になることが重視されると言う。

兩氏の指摘を簡略化すれば、中里見氏の指摘は「最後の話し手＝對話の勝利者」という式で、谷口氏の指摘は「後攻の話し手＝對話の勝利者」という式で示すことができる。そして、兩氏の指摘は論者が指摘した「後攻の話し手＝最後の話し手」という式とも全く矛盾していない。三つの式は「後攻の話し手＝對話の勝利者＝最後の話し手」という形であり、重なるのである。

このように文體の異なる作品を対象にした見解が奇しくも一致することは、三つの式を重ねた式が、文體という枠を

超えて、對話形式の作品全般に共通する伝統的な様式であることを示している。

それでは、この伝統的な様式を踏まえた上で、「進學解」の作中人物が話す順番に注目したい。對話の勝利者について言えば、それは、教師が最後に話す三段落構成説では教師になるのに對して、學生が最後に話す四段落構成説では學生になる。言いかえれば、教師は、三段落構成説では對話の勝利者として描かれることになるのに對して、四段落構成説では對話の敗北者として描かれることになるのである。

段落の分け方によって教師の描かれ方が正反對になることの重要な點は、教師が韓愈を彷彿させることにある。例えば、『舊唐書』（卷一百六十）韓愈傳²には次のようにある。

愈自以才高、累被擯黜、作「進學解」以自喻曰（韓愈は才能に優れているが、次々に斥けられ官位を落とされたと思っていたので、「進學解」を作ることによって自分で自分を喩え、次のように言った）

韓愈が不遇な自己を喩えたものであるという『舊唐書』の「進學解」解釋は、教師が韓愈を彷彿させるために生じたものである。また、このような解釋は、北宋の『新唐書』、南宋の『唐詩紀事』、元の『唐才子傳』、そして明代における韓愈の作品集の通行本である東雅堂本『昌黎先生集』の題下注にも見られる。そのため、教師が韓愈を彷彿させることは古くからの共通認識だと考えられる。

したがって、韓愈は自分を、三段落構成説では學生をやり込める對話の勝利者として描き出しているのに對して、四段落構成説では學生にやり込められる對話の敗北者として描き出していると言える。つまり、段落の分け方によって韓愈の自己の描き方も正反對になるのである。

そうであるならば、自分をどのように描き出すのが韓愈の特徴なのであろうか。その點から考えると、どちらの説が妥當なのであろうか。このような問題については次節で検討したい。

しかしながら、四段落構成説の方が妥當なことは、そのような検討を加えるまでもなく明らかである。なぜなら、様式への準據という中國古典文學に顯著な性質から考えれば、最後の話し手は學生でなければならぬからである。

作中人物が話す順番は、三段落構成説では「教師↓學生↓教師」というものであるのに對して、四段落構成説では「教師↓學生↓教師↓學生」というものになる。このような順番を「後攻の話し手⇄對話の勝利者⇄最後の話し手」という様式に照らし合わせてみると、三段落構成説では後攻の話し手と最後の話し手が別の人物になってしまうのに對して、四段落構成説では後攻の話し手と最後の話し手が同一人物であることが確認できる。

つまり、「進學解」は、三段落構成説では對話形式の作品全般に共通する傳統的な様式から逸脱していることになるのに對して、四段落構成説ではそれを踏襲していることになるのである。

もちろん、「進學解」がそこから逸脱した作品である可能性は残っている。しかし、論者は「進學解」がこの傳統的な様式を踏襲した作品であると考えている。

なぜなら、そのように考えると「自己戲畫化」という特徴が徹底されることになり、「進學解」をより深く解釋することが可能になるからである。その點については次節で論じたい。

また、「進學解」が件の様式を踏襲していることの傍證としては、「送窮文」という韓愈の別の作品もそれを踏襲していることが挙げられる。「送窮文」の作中人物が話す順番は「主人↓窮鬼↓主人↓窮鬼」というものである。ここからは後攻の話し手が最後の話し手でもあることが読み取れる。

しかも、この「送窮文」には「進學解」との共通點がいくつも見られる。例えば、西上氏が「有韻の主客の問答體であるばかりでなく、揚雄の作品『逐貧賦』を模倣している點で、『送窮文』は『進學解』の創作意圖に近い事がわかる」と指摘している以外にも、制作年代が比較的近いことや、韓愈と思しき者が登場することが指摘できる。

つまり、「送窮文」は「進學解」の姉妹編とも呼ぶべき作品なのである。そして、そのような作品においても件の様式は踏襲されているのである。

したがって、對話形式の作品全般に共通する伝統的な様式から考えても、四段落構成説の方が妥當であると言える。

第三節 韓愈は他者をやり込めるのか

三つ目の問題は韓愈の對話作品に見られる特徴との不一致である。韓愈の對話作品には韓愈と思しき者が何者かにより込められるという特徴が見られる。その点から考えれば、「進學解」の教師は學生にやり込められなければならない。しかし、三段落構成説では韓愈と思しき教師が學生をやり込めることになってしまふ。この節では、そのような問題点を検討したい。

ここでは「剝啄行」(八〇七)、「送窮文」(八一—)、「瀧吏」(八一—九)という三作品における主役の描かれ方を見て、韓愈の對話作品の特徴を確認したい。いずれの作品も韓愈と思しき者が何者かと對話するもので、制作年代が「進學解」(八一—三)と比較的近いものである。「主役」とは作者と思しき作中人物のことで、「剝啄行」では「我」と、「送窮文」では「主人」と、「瀧吏」では「官」と表記される人物のことである。

(一) 「剝啄行」

まずは、「我」と「従者」が對話する作品「剝啄行」を確認したい。「剝啄」とは、門を叩く音を表す擬音語であり、客の來訪を報せるものである。ことは主人である「我」がこの「剝啄」に應じないところから始まる。その理由を「従者」に質問された「我」は次のように答えている。

我不厭客、困于語言。欲不出納、以堙其源(私は客が嫌なのではなく、言葉に苦しめられているのだ。客の出入り

をなくすことで、その源を塞ぎたいのだ。

來客に應對しないのは、人との交わりを斷つことによつて、惡口を避けたいがためだと「我」は言う。そして、奥深くひっそりとした廣間に、むしろを敷く（空堂幽幽、有枯有莞）ことで、自らの居場所を確保し、家の門を二枚の板で閉じ、部屋に書物を集める（門以兩版、叢書於閒）ことで、外部との接觸を物理的にも、心理的にも斷ち、家の外に完全な垣根のような深い堀をめぐらす（窅窅深塹、其墉甚完）ことで、守りを幾重にも重ね、このようにして不可侵の空間を作り上げたことを「我」は「從者」に語る。それに對して「從者」は次のように述べている。

從者語我、嗟子誠難。子雖云爾、其口益蕃（召使いが私に言う、ああ、それは本當に難しいことです。あなたはそう言いますが、人の口はますます盛んになるものです）。

惡口を避けるための方法が、却つてそれを招くことを指摘し、それを避けるためには、思い切つて今の地位から離れるしかない（今去不勇、其如後艱）ことを「從者」は「我」に告げる。末尾の句で「我」が「從者」に謝るのは、このような諫言を受けたからである。

我謝再拜、汝無復云（私はお禮を言い再拜した、お前もう言うでない）。

結末では、社會的な上下關係が逆轉し、主人が召し使いにやり込められている。「我」は自ら弄した策が完全無缺であることを確信し、それが惡口の原因になっていることには氣付いていなかった。「剝啄行」の主役である「我」は、自らの愚かさに氣付かぬ者として、そして、目下の者によつて、それに氣付かされる者として滑稽に描き出されているのである。

（二）「送窮文」

次に、「主人」と「窮鬼」が對話する作品「送窮文」を確認したい。「送窮文」とは「主人」が「窮鬼」を「送」別す

る「文」という意味である。「主人」が「窮鬼」を遠ざけようとするのは、「窮鬼」が自身の「五患（五つの悩み）」であり、貧しさを招くためである。そのような「主人」に對して「窮鬼」は次のように述べている。

驅我令去、小黠大癡。人生一世、其久幾何。吾立子名、百世不磨（私を追い拂って去らせるのは、小さな賢しさ大きな愚かさ。人が生まれて一生で、その長さはどれほどあるのか。私があなたの名をあげれば、百代は滅びない）。

ここでは、後世に名を残せるという「窮鬼」の利點には氣付かぬままに、「窮鬼」を遠ざける道を選ぼうとする「主人」の愚かさが指摘されている。「送窮文」の主役である「主人」も目下の者によって自らの愚かさに氣付かされ、それを氣付かせた目下の者に謝るのである。

主人於是、垂頭喪氣、上手稱謝、燒車與船、延之上座（すると主人は、頭を垂れてがっくりし、手を上げてお禮を言い、車と船を焼き、窮鬼を上座に案内した）。

「窮鬼」を送り出すのに必要な「車」と「船」を破棄するのは、これからも「窮鬼」と一緒に暮らす道を選んだことを意味している。「窮鬼」を上座に案内することによって、社會的な上下關係が完全に逆轉し、そこに主役がやり込められるという滑稽味が生じている。

「剗啄行」でも、「送窮文」でも、この後に確認する「瀧吏」でも、主役が何者かにやり込められている。これは韓愈の對話作品に見られる特徴の一つだと考えられる。

なぜなら、「進學解」に先行する對話作品では主役が何者かをやり込めていたからである。例えば、前節で確認した東方朔「答客難」、揚雄「解嘲」、班固「答賓戲」では、「東方先生」「揚子」「主人」といった主役が、最後の話し手であり、對話の勝利者でもあった。

しかし、韓愈の對話作品はそうではない。主役の描かれ方が先行する對話作品とは正反對になっており、主役が目下

の者にやり込められているのである。

(三)「瀧吏」

最後に確認する「瀧吏」は、「官」と呼ばれる者が潮州に流される途中で、「昌樂瀧」の「吏」にからかわれ、叱責されたことを語るものである。

潮州がどんな場所かを問う「官」に對して、そこは罪人の行く場所であるから罪人でない私には知る由もない。これから行こうとしているのに、どうしてそんな質問をするのか、と「吏」は答える。このようなからかいを受けた「官」は自らの様子を次のように語っている。

不慮卒見困、汗出愧且駭(思いがけず苦しめられたので、冷や汗が出るほど恥ずかしい上に驚いてしまった)。

ここには「吏」からの豫想外の反論に苦しめられた「官」の様子が描かれている。この後も「吏」の言葉は長々と續く。引用箇所からの十八句では潮州の様子を誇張して語り、その後の二十句では、その分に相應しい働きをしてこなかった「官」が左遷されるのは當然の歸結であると述べる。そして、このような叱責を受けた「官」は自らの様子を次のように述べている。

叩頭謝吏言、始慙今更羞。歴官二十餘、國恩竝未酬。凡吏之所訶、嗟實頗有之(頭を地に叩き付けて吏に禮を言う、初めから恥ずかしくなかったので、今はさらに恥ずかしいです。二十餘りの官職を歴任しましたが、國の恩に報いたことは未だございません。あなたがお叱りになったところは、本當にいくらかございます)。

川合康三氏が「官と吏という序列が逆轉され、官が吏にやりこめられてしまうのである」と指摘する²⁰ように、結末では「官」が「吏」に謝っている。「官」が自らを恥じ、「吏」に謝意を示すのは、叱責されたところに思い當たる節があったことによる。すなわち、氣付いていなかった自らの愚かさに氣付かされたのである。

川合氏は言う「詩中の會話には小吏のそのみが記され」、「官」については引用箇所のように「恥じ入る姿が描かれるばかりである」と。そして、韓愈は「不安におびえる自分を戲畫化し、戲畫化することによって不安感を軽減している」のだと。

川合氏が「自己戲畫化」と呼ぶ、このような特徴は「剝啄行」にも、「送窮文」にも、そして「進學解」にも認められる。自らの愚かさに氣付かされる主役とは、韓愈が「自分とは別の視點、對立する存在を設け」、そこから自分を眺め、自分の愚かさを指摘し、愚かさを自覺した自分を戲畫化したものに他ならないのだと考えられる。

「進學解」の自己戲畫化については次のように言える。第一段落では、自らの不遇には目を向けずに、「今」の人材登用を肯定する者として、第二段落では、學生の指摘によって、自らの行爲の愚かさに氣付かされる者として描き出されている。

第三段落以降は、三段落構成説では、自らの愚かさに氣付かされてなお、それを認めずに、「今」の人材登用を肯定することによって學生をやり込める者として描かれることになるのに対して、四段落構成説では、自らの愚かさに氣付かされたがために、一轉して「今」の人材登用を非難し始めるものの、この本質には氣付いていないことをまたもや學生に指摘され、批判され、そしてやり込められる者として描かれることになる。

すでに確認したように、韓愈には自分をやり込められる者として描き出すという特徴が見られるのであるから、「進學解」の主役である教師は目下の者である學生にやり込められるべきであり、そのためには學生が最後の話し手として教師批判を行わなければならない。

したがって、韓愈の對話作品に見られる特徴から考えても、四段落構成説の方が妥當であると言える。

おわりに

本論考は次の二点を述べようとしたものである。第一に、「進學解」の段落構成に對する先行研究の見解には二つの説が併存していたことである。この點については第一章で、三段落構成の作品と理解するのが主流であるものの、四段落構成の作品と理解しているものも存在していたことや、このような二つの説のどちらが妥當なのかという問題が論じられていないことを指摘した。

第二に、他の作品との關係から考えれば、四段落構成説の方が妥當なことである。この點については第二章で、三段落構成説には三つの問題點があることを指摘した。

三つの問題點とは、一つ目に、教師への尊稱と理解すべきであるはずの「先生」を教師の自稱と理解しなければならぬこと、二つ目に、同一人物であるべきはずの後攻の話し手と最後の話し手が別の人物になってしまふこと、三つ目に、やり込められる者であるべきはずの教師がやり込める者になってしまうことである。

これらの問題點は四段落構成説では解消される。したがって、「進學解」は四つの段落に分けて讀まなければならぬというのが本論考の結論である。

四段落構成の作品として理解すると、韓愈が目下の者にやり込められるという應酬が繰り返されることになり、いわゆる「自己戲畫化」が徹底されるようになる。韓愈独自の表現と考えられる、このような自己の描き方から、いったい何が讀み取れるのか。また、「進學解」の内容はどのように變化し、解釋はどのように深まるのか。これらの詳細については稿を改めて論じたい。

- (1) 韓愈のテキストは、文章作品については馬其昶校注『韓昌黎文集校注』(一九七二・世界書局)に、詩歌作品については錢仲聯集釋『韓昌黎詩繫年集釋』(一九八四・上海古籍出版社)を用いる。
- (2) 宋代では、『文苑英華』、『唐文粹』、『崇古文訣』、『古文集成前集』に、元代では、『古文眞寶後集』、『續文章規範』、『文編』、『唐宋八大家文鈔』、『文章辨體彙選』に、清代では、『古文觀止』、『唐宋八大家文讀本』、『唐宋文醇』、『古文辭類纂』、『經史百家雜鈔』に收められている。谷口匡一『韓愈「鱷魚文」の位置』(二〇〇五・中國文化學會『中國文化』通號63)を参照した。
- (3) 日本のものでは以下が挙げられる。
- ① 星川清孝 新釋漢文大系 第16卷 『古文眞寶(後集)』(一九六三・明治書院)
 - ② 星川清孝 新釋漢文大系 第70卷 『唐宋八大家文讀本一』(一九七六・明治書院)
 - ③ 前野直彬 『韓愈の生涯』(一九七六・秋山書店)
 - ④ 猪口篤志 新釋漢文大系 第56卷 『續文章軌範(上)』(一九七七・明治書院)
 - ⑤ 佐藤保、和泉新 中國の古典26 『古文眞寶』(一九八四・學習研究社)
 - ⑥ 寛文生 鑑賞中國の古典 第20卷 『唐宋八家文』(一九八九・角川書店)
 - ⑦ 小野四平 『韓愈と柳宗元―唐代古文研究序説―』(一九九五・汲古書院) 第四章 韓柳散文論Ⅱ「開拓」と「收斂」
中國、臺灣のものでは以下が挙げられる。簡體字は常用漢字に、ダブルコーションは二重鉤括弧に換えた。
 - ① 丘永坪 「含而不露嗚不平」讀韓愈『進學解』』(一九八六・韓山師範學院『韓山師專學報(社會科學版)』)〇二期
 - ② 王慶堂 「滿紙辛酸淚 一片干謁情」韓愈『進學解』淺析』(一九八七・渭南師範學院『渭南師專學報(總合版)』)〇一期
 - ③ 陳載舸 「反邏輯思維的邏輯力量」談談『進學解』的特殊思維建構』(一九八八・湖北科技學院『咸寧師專學報(哲學科學社會版)』)〇一期
 - ④ 屈守元、常思春 主編 『韓愈全集校注』(一九九六・四川大學出版社)
 - ⑤ 羅聯添 編 『韓愈古文校注彙輯』(二〇〇三・國立編譯館 主編・出版)
 - ⑥ 劉眞倫、嶽珍 校注 中國古典文學基本叢書 『韓愈文集匯校箋注』(二〇一〇・中華書局)

⑦郭于海「感受大師風範—評析《進學解》」(二〇〇七・長江教育研究院、長江出版集團大家報刊社「新課程研究(職業教育)」〇九期)

⑧張再林「『正話反說』與『反話正說』—韓愈《進學解》的對話藝術」(二〇〇九・廣西語言文學學會、廣西大學中文系「閱讀與寫作」〇九期)

⑨劉洪仁「《進學解》『言雖多而不要其中』新解」(二〇一一・成都師範學院「四川教育學院學報」〇八期)

⑩張東年「韓愈《進學解》賞析」(二〇一一・曲阜師範大學「現代語文(學術總合版)」〇六期)
なお、①、⑦、⑩は「進學解」が三段落構成の作品であることをはっきりと述べている。

(4) 山崎純二「韓愈の設論一篇—とくにその滑稽感について—」(一九七一・早稻田大學中國古典研究會「中國古典研究」通號18)

(5) 西上勝「韓愈『進學解』の敘法について」(一九八六・東北大學文學會「文化」通號49)

(6) 林雲銘 評注「韓文起」卷二「進學解」(一九一五・上海會文堂書局)

(7) 清水茂 世界古典文學全集「韓愈I」(一九八六・筑摩書房)

(8) 第一段落では以下が挙げられる。「學業がすぐれぬことを氣づかえ、試験官に目がないことを氣づかうな。行いのりっばならぬことを氣づかえ、試験官の不公平を氣づかうな」第三段落では以下が挙げられる。「前へ來い」

(9) 第二段落では以下が挙げられる。「小も大も捨てられることはない」「はげんでいるといえましょう」「はやらぬ學說をひろめられる」「ただひとりさがしまわって遠く繼承される」「努力を費やしているといえましょう」「中をゆたかに外をのびのびとされたいいえましよう」「勇敢に實行に移された」「完成しているといえましよう」「かえって人に教育していらっしやる」第四段落では以下が挙げられる。「幸福なことではございませんか」「お似合いなのです」「猪苓を飲ませようとするものなのです」

(10) テキストは胡刻家本を影印した『文選』(一九七九・藝文印書館)を用いる。

(11) ①子張問曰「令尹子文、三仕爲令尹、無喜色、三已之、無愠色。舊令尹之政、必以告新令尹、何如」子曰「忠矣」曰「仁矣乎」曰「未知、焉得仁」(子張曰)「崔子弑齊君、陳文子、有馬十乘、棄而違之。至於他邦、則曰『猶吾大夫崔子也』違之。之一邦、則又曰『猶吾大夫崔子也』違之、何如」子曰「清矣」曰「仁矣乎」曰「未知、焉得仁」(『論語』公冶下)

②宰我問「三年之喪、期已久矣。君子三年不爲禮、禮必壞。三年不爲樂、樂必崩。舊穀既沒、新穀既升、鑽燧改火、期可已矣」子曰「食夫稻、衣夫錦、於女安乎」曰「安」(子曰)「女安、則爲之。夫君子之居喪、食旨不甘、聞樂不樂、居處不安、故不爲也。今女安、則爲之」(『論語』陽貨第十七)

③子貢曰「君子亦有惡乎」子曰「有惡、惡稱人之惡者、惡居下流而訕上者、惡勇而無禮者、惡果敢而窒者」曰「賜也亦有惡乎」
(子貢曰)「惡微以爲知者、惡不孫以爲勇者、惡訐以爲直者」(『論語』陽貨第十七)

テキストは、程樹德撰・程俊英、蔣見元 點校 新編諸子集成『論語集釋』(一九九〇・中華書局)を用いる。

(12) 過珙、黃越 評選『詳訂古文評註全集』(上海鴻章書局)

(13) ①星川清孝 新釋漢文大系 第16卷 『古文眞寶(後集)』(一九六三・明治書院)には「今先生、即ち私は」とある。

②星川清孝 新釋漢文大系 第70卷 『唐宋八大家文讀本』(一九七六・明治書院)には「今先生(自分)は」とある。

③猪口篤志 新釋漢文大系 第56卷 『續文章軌範(上)』(一九七七・明治書院)には「今先生(自分)は」とある。

④佐藤保、和泉新 中國の古典26 『古文眞寶』(一九八四・學習研究社)には「いま私は」とある。

⑤寛文生 鑑賞中國の古典 第20卷 『唐宋八家文』(一九八九・角川書店)には「いま先生は」とある。言葉を補ったりはしていないが、日本語譯の口調からして、この言葉を教師の自稱と理解していることは明らかである。

(14) 羅竹風 主編『漢語大詞典』二卷上・二三八頁左(漢語大詞典出版社) 用例のダブルコーテーションは鉤括弧に、コーテーションは二重鉤括弧に換えた。

(15) 七十五例の内譯は次の通りである。

詩歌では、「送文暢師北遊」(八〇六)に一例、「寄盧全」(八一二)に八例、「桃源圖」(八一三)に一例の合計十例。文章では、「太學生何蕃傳」(七九九)に二例、「行難」(八〇二)に十六例、「施先生墓銘」(八〇二)に十二例、「送浮屠文暢師序」(八〇三)に一例、「送陳密序」(八〇三)に三例、「毛穎傳」(八〇七)に一例、「唐河中府法曹張君墓碣銘」(八一〇)に一例、「貞曜先生墓銘」(八一四)に九例、「答殷侍御書」(八一八)に二例、「請上尊號表」(八二二)に一例、「送楊少尹序」(八二四)に一例、「後漢三賢贊」(三首)「(不明)」に二例、「送石處士序」(不明)に十四例の合計六十五例。「進學解」を除いた韓愈の作品の用例数の合計は七十五例である。

(16) 「送文暢師北遊」は、三句目から二十句目までが文暢の言葉だと考えられる。なぜなら、三句目の「自言本吳人」からは文暢の言葉が始まること、二十一句目の「謂僧當少安」からは韓愈の言葉が始まること、読み取れるからである。そして、「先生」という言葉は十五句目に見られる。したがって、方世舉が「先生、文暢稱公」と述べる通り、「先生」という言葉は文暢が韓愈を呼んだものであると考えられる。

(17) 黎靖德 編・王星賢 點校『朱子語類』(一九八六・中華書局)

- (18) 『容齋隨筆』(一九九八・上海古籍出版社)
- (19) 中里見敬「中國文學における物語行爲の諸相―賦と自傳の場合―」(一九九六・山形大學『山形大學紀要』(人文科學) 13卷3號)
- (20) 谷口洋「揚雄の『解嘲』をめぐって―『設論』の文學ジャンルとしての成熟と變質―」(一九九二・京都大學文學部中國語學中國文學研究室『中國文學報』通號45)
- (21) 『舊唐書』(一九七五・中華書局)
- (22) 注の5を參照。
- (23) 川合康三「韓愈と白居易―對立と融和―」(一九九〇・京都大學文學部中國語學中國文學研究室『中國文學報』通號41)
- (24) 注の23を參照。

付記 本論考は、第五十八回東北中國學會(二〇〇九年五月三十一日)および第二十回中唐文學會(二〇〇九年十月九日)での研究發表をもとにしている。貴重なご意見を賜った先生方や、發憤の切っ掛けを與えてくださった先生方に、ここで改めて感謝の意を表したい。